The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『奥の細道』の制作過程について : 曾良自筆本『奥の細道』の考察
Author(s)	杉浦, 正一郎
Citation	語文. 1951, 2, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68369
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『奥の細道』の制作過程について

——曾良自筆本『奥の細道』の考察

杉浦正一郎

近頃、私の研究意欲をそゝられてゐる問題は、芭蕉の制作過程を通して、芭蕉の制作心理を追及し、何故にかゝる推敲のプロセスを経て、成稿にみちびいたかの点を明かにしてみたいと云ふ課題である。この問題は、幸ひ芭蕉程、その成稿に至るさま〳〵の作品過程のよく判つてゐる作家はなく、発句・連句・文章の各々に亙つて、それぞれ確実な資料を挙げうるので研究資料には十分惠まれてゐるわけである。一、二の例を挙げてみると、曾良の『奥の細道随行日記』の発見によつて、細道旅行中の、その制作地に於ける芭蕉発句・連句の初案の形が知られ、其の後の再案、三案の形の知られることによつて、芭蕉の推敲のあとを如実に知りうるのである。又、かの幻住庵記の如きも成稿に至る幾通りかの形が今日知り得るし、且つその推敲過程の苦悩を示す芭蕉の書簡ものこつてゐるので、その成稿に至るまでの苦心経営のさまは歴々と指摘出來るのである。

この問題は、芭蕉個人の制作の秘密に触れると共に、芭蕉がいかにして中世的なものを近世的なものに切りかへたか、韻文学界に於ける近世文学の開拓者たる名誉は何故に芭蕉に與へられねばならぬか、等の問題を、同時に或程度明らかにするであらう。

今、こゝに述べようとする課題は、私の右の意図による研究テーマの一環として、最近私の手許に入つた『奥の細道』の一写本をめぐつて、研究の一端を述べてみようと思ふのである。

右の写本は、之も最近私が伊豆伊東の斎藤浩介氏の御好意により割愛をうけた曾良の『奥の細道随行日記』に附随してゐたものである。と、云ふより寧ろ、その傳來からすれば其の主従関係はまさしく逆であつた。両書が一緒に收められてゐた古い桐箱にも『細道』の方が主、『日記』の方が従とした箱書が書かれてゐるし、その箱の中に收められてゐる両書の讓り狀にもそのやうに認められてゐるのであつた。それは即ち若人自筆の次の一通である。

「覚

一、芭蕉翁正筆
奥の細道一冊 并
曾良旅日記 添

右者河合曾良傳來ニ而
拙者所持之処今度就御所
望御讓申候事実正也

仍而如件

庚子四月十日　若人（署名の下に「若人」の陰刻朱印有）

助宣雅君　」

この讓狀の筆者若人は、もと上諏訪の人である曾良の傳來品を持ちつたへた事、及び筆蹟、筆紙の質からみて、かの幕末頃の信州諏訪住の著名俳人久保島若人のことゝ思はれる。若人は本名を権平と云ひ、高島藩士であつた。天理図書館藏の当時の全国俳人の名簿である『俳家人名錄』といふ大部な稿本には、

若人　上諏訪藩中　久保嶋権平

と見えてゐる。尾張の士朗門で、著書に『深川帖』『昔蓑』『花贈』等があり、別に濤観の号があつた。嘉永四年八月二十八日、八十九才で歿したと傳へる。この歿年からみて、日附の「庚子」は、天保十一年なる事が判るのである。讓り相手たる助宣は、その俳号の人は、当時の江戸俳人で、幕府の家士と云はれる結城平藏の助宣がゐるが、同人かどうか明らかでない。

さて、右の文中に云ふ如く、芭蕉翁正筆と傳へる『奥の細道』が主で、「曾良旅日記」と傳へるかの『奥の細道随行日記』が從なのである。若人が曾良日記を傳來してゐた事は、古く遠藤曰人の『蕉門諸生全傳』（文政年中稿本）の、曾良の條に

曾良日記　若人（スワ家來久保島久左衛門也）持傳ウ。

と見えてゐて、昔から知られてゐたらしいが『細道』の方はさうした話を一向きかないのである。若人は前記のその著書『花贈』（天保五年十月序）に、自分の秘藏する芭蕉自筆の「かげろふの我肩にたつかみこかな」の歌仙を模刻してゐて、その翁自筆歌仙も所藏してゐたらしく、さうした翁眞蹟類に関心を持つてゐた人である事が分る。

ところが、今私の紹介しようとする『細道』は曾良日記と共に傳來したものではあるが、芭蕉正筆とはどうも考へられないものである。時代は正しく元祿のもので、紙質・筆蹟からみて芭蕉と同時代のものである事は明らかである。しかし芭蕉の自筆ではないのである。そこで考へるのに、この『細道』が果して若人の讓つた当時のものかどうかといふ疑問である。昨昭和二十五年六月号の岩波の『文学』に私は「奥の細道の一資料をめぐりて」と題する一文を発表し、その中に本間本『奥細道菅菰抄』板本の朱の書入に次の重要なる資料を見出した事を紹介した事がある。即ち、

先年信濃より出たりとて、祖師（芭蕉）眞筆の草稿に、曾良が腰帳を添て賣物に出たる事あり。松平志摩守との買上られたり。其御草稿には越後路の事も多く記し置れし也。さるを校合の時に、朱あるひは墨もて十字に打消して有とそ。夫を見たる人の話也。其訳ハ註者の云る処、予の心に符合す。

――右の文章に云ふ芭蕉自筆の『細道』は実物を見た人の言によつて、今日我々のみてゐる本文とは異り、越後路の事も詳しく書きそれをのちに朱や墨で十字に消してあつたものらしい。又、右に云ふ「曾良が腰帳」は、所謂『随行日記』の原本が小型の横帖で、なるほど腰帳といふ名に適はしいものだから、『随行日記』を正しく指してゐるものと思はれる。即ち文化文政の頃に、さうした芭蕉正筆『細道』の草稿が曾良の『随行日記』と共に賣物に出たのであつた。

ところが、今度『随行日記』と共に、私の手許に入つた『細道』は芭蕉の筆蹟に極めてよく似てはゐるが、翁の正筆ではなく、且つ

越後路の辺も普通の本文の如くである。だから、右の本間本朱註の云ふ翁正筆の草稿ではなかつた。さうとすると、若人の讓つた当時の『細道』が右の本間本の云ふ草稿であつたのが、それ以後の傳來の間に『細道』の方丈別本とすりかはつたものか、或は又若人の讓つた当時から、今のまゝで、若人はこの芭蕉自筆ならざる『細道』を、翁正筆と信じて秘藏してゐたのか、或ひは自ら信ぜずして、かく称してゐたものか、いづれかであらうか。其の間の事情は、今日我々の推定し難い範囲にあるものゝやうである。私の任務は、私に與へられたこの傳翁正筆の『細道』の資料的價値を究明すれば良いのである。

この本は、縦二十一糎、横十四、五糎、普通の半紙本よりやゝ小型である。表紙は藍色、題簽は中央に「おくのほそ道」と細い流麗な字で書かれてゐる。曾良の書躰と思はれる。紙数は、三十五枚あり、表紙の裏に「此紙員三十五葉」と墨書せる紙片がはりつけられてゐる。本文は大体十七八字詰位の九行詰で記されてゐる。本文の右側に訂正のあとが記され、本文は見せ消ちになつてゐるので原型はそのまゝ読みうるのである。そして私が最初この本文をひと目みたとき、所謂河西本の本文をすぐ思ひ浮べたので、両者を比較してみると、ほぼ其の関係が推定出來るので、左に素龍自筆本と、この曾良自筆本と今ひとつ右の河西本との比較を次にかゝげてみよう。河西本は私はまだその本をみてゐないのであるが、幸ひ勝峯晋風氏が俳書大系本『芭蕉一代集』の『奥の細道』本文のあとに、河西本との考異を記して居られるので、今便宜その異同表に拠らせていたゞく事とする。河西本は勝峯氏の解説によると、信州諏訪町、河西五郎氏の藏本で、芭蕉の眞蹟本又はそれに近いものを臨書したものかとあり、本文及び挿入句の異同中に、初稿本らしき佛を残してゐるとある。私の曾良自筆本は、初めの部分など殊に、芭蕉自筆かと一寸思へる程よく芭蕉の字と似てゐるが、仔細に檢すると、さうではなく、芭蕉の草稿を臨書したものと思はれ、臨書につかれて來た部分に、曾良の字体がその地金のまゝ出てゐる点に興味を覚えるのである。その曾良の字体は、今日残つてゐる私の知りえた限りの曾良の眞蹟類と比較してみて、曾良の書体である事は間違ひないと信ずる。河西本は写しはのちのものらしいので、或ひは若しかすると私の曾良自筆本の系統のものでないかと推定される。

左に、その異同表をかゝげるが、異同の場所を示すために、便宜、拙著『素龍本影印校註奥の細道』によつて頁数と行数を記してゆく。拙著は井筒屋初印本の写眞版で、本文は素龍自筆本を透き写しにして板下にしたもので、拙著は素龍自筆本との異同を註記してゐる。而して素龍自筆本と頁数や行数も一致するわけだから便利だと思ふ。

〔頁数・行数〕	〔素龍自筆本〕	〔曾良自筆本〕	〔河西本〕
※ 一頁二行	舟の上に生涯をうかへ	涯とかきて右に、涯と改む	
〃 三〃	馬の口とらえて	とらへて、をえに改め又夫を消す	
〃 四〃	老をむかふる物ハ	むかふるものは	
○ 〃 六〃	予もいつれの年よりか	予も、初めなし、後に入る	
〃 七〃	漂泊の思ひ	おもひ	
△ 〃 八〃	海濱にさすらへ	さすらへて	
※ 〃 〃	江上の破屋に	の、初めなし、後に入る	

○	二〃二〃	やゝ年も暮春立る。	春改れは、を立るに改む
◎	〃 三〃	霞の	そゝろかみの、物に付て、とかみの、の下に朱の句読点有。且つ、付をつきと改む。
		そゝろ神の物につきて	こゝろをくるはセ
	〃 四〃	心をくるハセ	付かへて、をゝとし、
	〃 六〃	笠の緒付かえて	又夫を消す
○	〃 七〃	松島の月先心にかゝりて	心もとないを、心にかゝりてと改む
△	〃 八〃	人に讓り	讓りて
	三〃二〃	ひなの家	雛の家
○	〃 三〃	面八句を庵の柱に	面八句を書て、を二字消す　如上
○	〃 三〃	彌生も末の七日明ほのゝ	彌生も末の七日、元祿二とせにや、明ほのゝ、と七字消す　如上
	〃 四〃	月ハ在明にて光おさまれる	月ハ有あけにてひかりおさまれる
	〃 六〃	不二の峯	富士の峯
	〃 七〃	又いつかはと	いつかわ、としはと改
※			猶、とす
	四〃六〃	行道なをすゝます	此たひ、を消して上の如く改む
○	五〃一〃	ことし元祿二とせにや	たゝかりそめに思ひ立て
	〃 二〃	只かりそめに思ひたちて	

	〃 三〃	重ぬといへ共	重ぬといへとも
	〃 四〃	いまために見ぬさかひ	いまた目に見ぬ境
○	〃 五〃	定なき願の末をかけ	定めなき願の末を架て、を、かけ、と改む
○	〃 六〃	早加と云宿にたとり着にけり	たとりて、をたとり着にけりと改む
○	六〃一〃	夜の防き	夜ル臥爲と云、を夜ルの防き、と改む
	〃 三〃	さりかたき餞なと	花むけ
○	〃 四〃	打捨かたくて	捨かたく、後にてを入る
○	〃 五〃	路次の煩となれるこそ	なるこそ、として後、間にれを入る
○	〃 六〃	室の八嶋に詣す同行曾良か	八嶋に詣ス曾良か、と して後同行を入る
	〃 八〃	無戸室に入て	無戸室、と仮名ふる
	〃 〃	燒給ふ	燒たまふ
	七〃二〃	生れ給ひしより	うまれ
	七〃三〃	読習し侍も	侍るも
	七〃五〃	世に傳ふ事も侍し	こと
	七〃六〃	日光山の拳に	麓
	八〃一〃	打解て休ミ給へと	打とけて休み給へと
※		剛毅木訥の	木訥とし後訥に改む
	〃 七〃		

○ 〃 八〃	氣。禀の清質	智、惠の、とし後氣。禀。と改む
※ 九〃四〃	空海大師開基。の時	開記とし、後基。と改む
〃 七〃	栖隱なり。	也、
※ 〃 八〃	筆をさし。置ぬ	指置ぬ、とし後さし。と改む
○一○〃一〃	あら。たうと	あなたふと、としなを朱にてら。と、ふを墨にてう。と改む
○ 〃 五〃	。曾良ハ河合氏にして	上に、同行とし、後削る
○ 〃 〃	惣五郎と云へり。	惣五郎と云、とし後へりを入る
〃 七〃	こ。のたひ松し。ま。	此たひ松嶋
一一〃一〃	悅ひ	よろこひ
○ 〃 一ミ	羈旅の難をいた。ハ。らん。と	いたはり、としいたは。らんと、と改む
△ 〃 二〃	墨染にさまをかえ。	さまをかへて、をえと改め又夫を消す
〃 五〃	力。ありて	力有て
〃 六〃	廿。餘丁	二十餘丁
※ 〃 八〃	碧。潭に落たり	碧潭に落、とし碧。と改め、落たり。と改む
▽ 〃 〃	岩窟に身を	岩の下二字空白を朱にて窟。に、と入る（芭蕉の草稿よめぬまゝ空白

一二〃三〃	夏の初	にせしか）夏の初、と朱にて振仮名せり
△ 〃 七〃	雨降日暮る。	暮るゝ
一三〃三〃	情しらぬにハ非。す	あらす
〃 四〃	されと。も	され共
△ 〃 四〃	縱。横。にわかれて	東西縱横にわかれて
〃 六〃	ふみたかえん。	ふみたかへむ、をえとし夫を消す
○ 〃 七〃	馬を返し絵へとか。し。侍。ぬ。	返し給へと、ちいさきものふたり、とつゞけたるを、後、かし。侍。ぬ。の四字入る
〃 八〃	ちいさき者。ふたり	ちいさきものふたり
一四〃一〃	独。ハ小姫にて	ひとりハ
〃 七〃	淨坊寺何かし	何某とし某を消して何かし、とす
〃 八〃	あるしの悅。ひ。	よろこひ
一五〃四〃	日とひ郊。外に	郊の字あいまいなりしを朱にて郊と右に記す
〃 五〃	犬追物。の	犬追もの、ゝ
※ 〃 七〃	古墳。を	墳とし後墳。と改む
〃 七〃	それより。八幡宮に	それ方
△ 〃 八〃	与市。扇の的を射し時	与市宗高の二字入れり
〃 〃	別。してハ	別、てハ

一六〝二〝	此神社にて侍と聞ハ	此神社にて侍ると聞ハ	
※〝 三〝	しきりに覚えらる	しきり覚らる、とし後	しきりにと朱にてにを補ふ。又覚らるの右に朱にてラルと記す
〝 七〝	足駄を拜む	足駄をおかむ	
△〝 八〝	仏頂和尚山居跡あり	仏頂和尚の山居の跡有	
一七〝五〝	いつそや聞え給ふ	とのを二つ入る	
〝 七〝	道のほと打さハきて	きこへ、とし後えと改む	
〝 八〝	彼萃に到る	道の程	
一八〝一〝	谷道遥に	彼麓に到る	
〝 二〝	松杉黒く	谷道はるかに	
〝 五〝	さてかの跡ハいつくのほとにや	くろく	
○〝 六〝	後の山によちのほれハ	さて彼跡はいつくの程にや	
〝 八〝	みるかことし	かけのほれは、とし後	
○一九〝一〝	庵ハやふらす夏木立	よちと改む	
		見るかことし	
		くらハす、とし後やふ	如上
		らすに改む	
△〝 二〝	とりあへぬ一句を柱に	とりあへぬ一句、柱に、(をなし)	方
〝 三〝	館代より		

〝 四〝	短册得させよと乞	短尺	
○〝 七〝	野を横に馬牽むけよほとゝきす	野をよこに馬挽むけよ郭公、とし、後挽を牽に改む	
二〇〝三〝	清水なかるゝの柳ハ蘆野の	流るゝの柳ハ芦野の	
○〝 五〝	此所の郡守戸部某	郡守故戸部某とし、故を消す	
〝 六〝	此柳みせはや	見せはや	
〝	の給ひ聞え給ふを	の給ひきこへ給ふを、	
〝 八〝	今日此柳のかけにこそ	とし後きこえと改む	
二一〝一〝	立より侍つれ	立寄侍つれ	
〝 三〝	心許なき日かす	心もとなき日数	
〝 〝	白川の関	白河の関	
〝 五〝	いかて都へと	みやこへ	
〝 〝	便求しも断也	便もとめしも断なり	
〝 七〝	心をとゝむ	こゝろを	
〝 〝	秋風を耳に	秋かせ	
〝 八〝	紅葉を俤にして	もみちを俤にして	
二二〝二〝	雪にもこゆる心地そする	こゝち	
〝 三〝	冠を正し	たゝし	
〝 六〝	晴着かな	哉	

二三〃二〃	かけ沼と云所を	かけ沼、としけに朱の濁点ふる
〃 三〃	今日ハ空曇て	けふは
○〃 四〃	等窮といふものを尋て	等躬といふものをたつねて、とし後躬を窮に改む
△〃 六〃	いかにこえつるやと	こえつるにや
二四〃一〃	思ひめくらさす	おもひ
○〃 四〃	脇第三とつゝけて三卷となしぬ	一卷となしぬ、として後に一を三に改む
〃 五〃	大きなる栗の	大キ成栗の
※〃 七〃	閒に覚られて	閖に、とし後朱にて閒と改む
○二五〃六〃	等窮か宅を	等躬、とし後窮と改む
〃 七〃	路より近し	道よりちかし
〃 八〃	やゝ近うなれハ	やゝちかふなれハ、とし「ふ」を後うに改む
二六〃七〃	忍ふのさとに行	忍ふの里
〃 八〃	石半土に埋て	石の半、とし後のを削る
二七〃一〃	來りて教ける	をしへけるかとし、かを朱にて削る
〃 二〃	昔ハ此山の上に麦草をあらして此石を	むかしはこの山の麦、にムキと仮名振、この石と有

〃 四〃	石の面下さまに	石のおもて
〃 七〃	手もとや昔	むかし
〃 八〃	月の輪のわたし	渡し
二八〃二〃	左の山際一里半斗	ひたりの山際一里半計
〃 四〃	琴に大手の	麓に
〃 五〃	人の教ゆるにまかせて	をしゆるに
〃 八〃	先哀也女なれとも	先あはれなり、をんなゝれ共
二九〃一〃	かひ〳〵しき名の世に聞えつる物かなと	かひ〳〵敷名の世に聞へつるもの哉と
二九〃三〃	寺に入て茶を乞へハ	ちや
○〃 六〃	笈も太刀も五月にかされ帷幞	弁慶の笈をも、を消して、笈も太刀も五月にかされ、と改む
○〃 七〃	五月朔日の事也	也を消してにやと改む
○〃 八〃	温泉あれは	出湯を消して温泉と改む
※三〇〃二〃	灯もなけれハゐろりの	といし火ゆるりの火、とし後ゐろりと改む
〃 三〃	寢所をまうけて臥す	ふす
○〃 五〃	臥る上よりもり	ふしたる上に雨もりて、を消して、ふせる上よりもり、と改む

如上

如上

如上

三一〃一〃	猶夜の余波心すゝます	よるの名残
〃 二〃	遙なる行末をかゝえて斯る病	はるかなる行末をかゝえてかゝるとし、かゝえのえをへに改む
〃 四〃	羈旅辺土の行脚	羈旅辺—土の行—脚、と朱にて—を附す
〃 四〃	捨身無常の観念道路に	捨—身、無常の観—念、道—路と朱にて—を附す
〃 六〃	是天の命なりと	命也と
〃 七〃	路縦横に踏て	道
〃 八〃	鎧摺	あふみ摺、とし、ふに朱の濁点附す
△〃 八〃	白石の城を過	過て
三二〃一〃	笠鳴の郡に入れハ	笠しま
〃 二〃	いつくのほと	程
◎〃 三〃	足より遙右に見ゆる	是ゟ遙右に見ゆる（右と明らかに書けり）
〃 四〃	道祖神の社かた見の薄	道—祖—神の社かたみの、と朱にて—を入る
○〃 五〃	今にありと教ゆ	今に侍りとをしゆ、とし侍りをありと改む 如上
〃 七〃	よそながら眺やりて	なかめ
〃 八〃	簑輪笠鳴も	みのわ笠しまも
三三〃三〃	岩沼に宿る	笠鳴はいつこ、の句の

〃 四〃	覚る心地ハすれ	中程より次行に岩沼宿と書けり
〃 六〃	昔の姿うしなハすと	目覚るむかし
〃 七〃	能因法師思ひ出	おもひ出、とし出の右下に朱にてッと補へり
三四〃二〃	跡もなしとハ詠たり	よみたり
〃 四〃	あるひハ植継なとせしと	植次とし、次を継と改む 如上
△〃 五〃	かたちとゝのほひて	とゝのひて
〃 七〃	武隈の松みせ申せ	たけくまのわたつて
三五〃二〃	名取川を渡て	心あるもの
〃 五〃	聊心ある者と聞て	このもの
〃 六〃	この者	けしきおもひやらる
三六〃一〃	秋の氣色思ひやらる	つゝしかおか、とし後岡と改む
〃 二〃	つゝしか岡	あせひ咲比也
〃 二〃	あせひ咲ころ也	日かけも
〃 三〃	日影ももらぬ	むかしも
〃 四〃	昔もかく	おかみて
〃 七〃	御社なと拝て	かきて。且にカッと朱
〃 八〃	畫に書て送る且紺	

※三七〃一〃	の草鞋二足。餞す	の仮名ふれり二束とし、後足と改む、はなむけと書。
〃 三〃	其実を顯す	あらはす
〃 五〃	かの畫図にまかせて	彼畫図に
三八〃四〃	数里をしるす	印ス、として消して、しるすと改む（数里と書けり）
〃 八〃	惠美朝臣獵	獵に朱にてカリと振仮名す
△〃 八〃	十二月朔日	十二月一日
三九〃二〃	歌枕おほく語傳ふと	多くかたり傳ふと、多の右にヲ、と朱書せり
◎〃 三〃	山崩川（板本の素龍本は、川落てと誤る）	山崩川流て（上の如く素龍自筆本と同じ）
〃 六〃	流て	事のみ、爰到りて、とし後に爰の上に、を補ふ
※〃 六〃	たしかならぬ事のミを爰到りて	うたかひなき
〃 七〃	疑なき	悅
四〇〃一〃	存命の悅ひ	羈旅の
〃 二〃	羈旅の労をわすれて	はねを□ハし、と不明の字を消し、朱にてかと入る
※〃 六〃	はねをかハし	契りの末も終には
△〃 七〃	契の末も終ハかくのことときと	

〃 八〃	悲しさも増りて	かなしさも
四一〃一〃	人相のかねを聞	入逢の
〃 二〃	夕月夜幽に離か嶋もほと近し	かすかに離か嶋も程ちかし
〃 三〃	蜑の小舟	あまの
〃 四〃	着わかつ声〳〵に	着わかつこゑ〳〵に綱手
〃 五〃	かなしもとよみけん	かなしもよみけむ哥の、こゝろも、と、かなしもの次に朱にてとを入れ哥の、の二字を消す
四一〃六〃	いとゝ哀也	いとゝあハれ也
〃 七〃	奥上るりと云ものを	奥上留り
四二〃一〃	ひなひたる調子う。ち上て枕ちかう。	打上て枕ちかふ、とし ふを朱にてうと改む
△〃 三〃	辺土の還風忘れさるものから	辺国の
〃 四ミ	塩かまの明神に詣	塩竈の明神に詣ツ
○〃 五〃	国守再興せられて	再興改られて、とし改を消してせとす
※〃 六〃	彩縁きらひやかに	彩一掾
〃 七〃	九仞に重り	九尋に、とし尋を消し如上て仞とす
四三〃一〃	塵土の境まて神霊あらたに	塵土のさかひまて神霊

○〃	一〃	いと貫けれ。	貫シ、のシを消しけれ。と改む
〃	三〃	宝。燈有かねの戸ひらの面に	宝―燈有かねの戸ひらのおもてに、宝と燈の間に朱にて―をひく
〃	八〃	したハすといふ事なし	したはすと云事なし
○四四〃一〃		義を守へし。	義を守て佳命をおもふへし、とし七字を消す
○〃	三〃	松嶋にわたる其間二里餘雄島の	渡る其間二里餘小しまの
○〃	五〃	抑。ことふりにたれと松嶋ハ	抑松嶋ハ、とし右に、事ふりにたれとを入るをよそ
〃	六〃	凡。洞庭西湖を恥す	浙江、と墨にて振仮名す
〃	八〃	浙江の潮をたゝふ	浙江、と墨にて振仮名す
四五〃一〃		欹。ものハ天を指	欹、と墨にて振仮名す
◎〃	二〃	波に甫訇（素龍本仮本はかく有も素龍自筆本は甫の中に門の字を書けり）	（素龍自筆本と同じ字姿を書せり）（かき、右ニハラハウと墨）
〃	三〃	左にわかれ右につらなる	左りにわかれ
〃	四〃	抱。るあり兒。孫愛すかことし	抱ル あり兒―孫
〃	五〃	松の綠。こまやかに枝。葉	松のみとりこまやかに枝―葉

※〃	大〃	屈曲をのつから	窟曲、とし窟を消して屈とす
〃	八〃	ちはや。振神の昔	千早振
四六〃二〃		造。化の天工	造―化の天工
○〃	四〃	雄。嶋の磯ハ	小嶋、として小を雄と改む
〃	六〃	將。松の木蔭に	將、に朱にてハタと振仮名す
〃	八〃	落穗。松笠なと打け。ふ。りたる	落ほ松笠なと打煙たる
※四七〃一〃		閑。に住なし	聞に住なし、とし朱にて聞を閑に改む
〃	三〃	月海にう。つりて	移りて
※〃	四〃	江上。に帰りて	江山、とし山を朱にて上と改む
〃	五〃	窓をひ。らき。	窓を開
〃	七〃	妙。なる心地ハせらるれ	たへ、とし後妙と改む
四八〃三〃		松嶋の詩あ。り。原安適松のうらしま	詩有…松のうらしま、とし後朱にて松が、と濁点す
※〃	四〃	和哥を贈。らる	送
※〃	五〃	杉風浊子。か。発句あり	杉風浊子、発句有り（かナシ）
四九〃二〃		雲居禪師の德化に依て	仍て、とし後よ。つて。と改む

〃	六〃	平和泉と心さし。	心指、とし後さし。と改む
〃	七〃	緒たえの橋なと聞傳て。	聞傳えて、とし後へと改む
〃	七〃	人。跡稀に	人跡（ヒト）とし、後ヒトを朱にて消し、朱にて間に一を入る
五〇〃一〃		路。ふミたかえて	道、ふみたかへて、とし後たかえてと改め、又夫を消す
〃	二〃	石の卷といふ湊に出。	海上ニ、見渡シ、出ス
〃	三〃	海上に見わたし。	けふり
〃	五〃	竈の煙。	おもひかけすかゝる所にも
〃	六〃	思ひかけす斯る所にも	更、宿かす、とに脱、明して
※〃	八〃	更に宿かす人なし	尾ふちの卷、まのゝかや、朱にて改む
五一〃一〃		一夜をあかして	尾ふちの卷まのゝかや、とし後卷を牧と改む
※〃	三〃	尾ふちの牧まのゝ萱ハら	はるかなる…心ほそき
〃	四〃	遙なる堤を行心細き	二十餘里程と覚ゆ
〃	六〃	其間廿余里ほとゝおほゆ	なりて
五二〃一〃		田野に成て	

〃	八〃	さし。堅め夷をふせくとみえたり	指かためゑそをふせくと見えたり、とし、指をさし、ゑそを夷（エッ）と改む
五三〃一〃		偖も義臣すくつて此城にこもり	扨も…籠り
〃	二〃	一時の叢となる	草村
※〃	三〃	城春にして草青みたり	草を初め脱し後朱にて補ひ、草青ミたり、とす
〃	五〃	泪を落し侍りぬ	なみた
〃	六〃	夏草や兵ともか	夏艸や兵共か
五四〃一〃		三將の像をのこし	残し
〃	四〃	珠の扉風にやふれ	玉の
△〃	四〃	霜雪に朽て	摧とし、後朽と改む
〃	五〃	空虚の叢と成へき	草村となるへきを
〇五五〃一〃		五月雨の降のこしてや光堂	五月雨や年〳〵降て、（後てをもと改めあり）五百たひ、とし、後、五月雨の降残してや光堂、と改む螢火の書は消つゝ柱かな、と有、後全部を消す
◎〃	〃	（右の句の次に下の一句ありて消す）	南部、道はるかに小黒崎水の小嶋、とす
〃	二〃	南部道遙に小黒崎ミつの小嶋を	
※〃	三〃		

〃	四〃	尿前の関	尿前（シトマヘ）
〃	六〃	此路旅人稀に	此道
五六〃一〃		封人の家を見かけて舍を求む	封一人…舍りを求ム
◎〃	四〃	蚤虱馬の尿する	尿（ハリ）、と振仮名有
〃	七〃	道しるへの人を頼て	頼ミて
※五七〃一〃		若者反脇指をよこたえ	若もの脇指をよこたへ
			とし後反の字を入、よこたへのへをえと改め
			又夫を消す
〃	四〃	あやうきめにもあふへき	あふへきのへの字あいまいなりしをへと改む
〃	五〃	辛き思ひをなして	おもひ
〃	六〃	高山森々として	森〳〵、
〃	八〃	夜る行かことし	夜ル行かことし
五八〃一〃		雲端につちふる	土ふる
〃	二〃	岩に巌て	つまついて
〃	四〃	最上の庄に出つかの	出ス彼
〃	五〃	此みちは必不用の事	この道
〃	六〃	悲なうをくりまいらせて	つゝがなう送り
五九〃二〃		清風と云者を	云ものを

○〃	三〃	志いやしからす	心さしさすかにいやしからす、としさすかに、を消す
○〃	四〃	折々かよひてさすかに旅の情をも知たれハ	さすかに、初めなく後補ふ。情をもしりたれハ、と有
※〃	六〃	さま〳〵にもてなし侍る	さま〳〵と、と有しをにに改む
六〇〃一〃		這出よかひやか下の	かいや
※〃	三〃	螢飼する人は古代のすかた哉	子飼する人は古代のすかたかな、とし後螢と改む
〃	四〃	立石寺と云山寺あり	立石寺（シヤク）と云山寺有。立石の間に朱にて一をひく
※〃	五〃	慈覚大師の開基	開記、とし後基と改む
〃	八〃	其間七里はかり也	七里計なり
六一〃一〃		禁の坊に	麓
〃	二〃	山上の堂にのぼる	山上の堂に登ル
◎〃	三〃	岩に巌を重て	岩尾、とし、後巌と改む
〃	〃	松柏年旧土石老て苔滑に	松一柏年ふり土一石老て苔なめらかに、と間に朱にて一をつく
〃	四〃	岩上の院々	岩上の院と、とし上の

〃 五〃	物の音きこえす	の二字あいまいなりしを朱にて上のと改め、又とを〻と同じく朱にて改む
〃 七〃	心すミ行のミおほゆ	きこへすをえと改む こゝろすミ行のミ覚ゆ
六二〃一〃	最上川のらんと大石田と云所に	もかみ川乗らんと…と云ところに
〃 二〃	古き誹諧の種こほれて	俳諧のたね、とし俳を誹と改む
〃 三〃	忘れぬ花のむかしを	わすれぬ
〃 四〃	芦角一声の心をやハらけ	芦―角一―声の心をやわらけ、と朱にて―を入れ、又わをハに改む
〃 六〃	みちしるへする人	道しるへ
△〃 七〃	わりなき一巻残しぬ	一巻を（を入ル）
六三〃一〃	爰に到れり	いたれり
〃 三〃	こてんはやふさ	ごてん
〃 五〃	左右山覆ひ	左―右山おほひ
○〃 六〃	是に稲つミたるをやいな船といふならし	是を、いなふねと云、とし後に、稲つミたるをや、及び、ハ云ならし、を入る
六四〃三〃	五月雨をあつめて	さみたれを

※〃 四〃	早し図司左吉と云者を	図の字かきそこなひて右に図と改む
○六五〃一〃	四日本坊にをゐて誹諧興行	四日於ニ本坊一俳諧興行、とし返り点送り仮名朱にてうちしを、後於を消し、にをゐてを補ひ、俳を誹と改む
○〃 六〃	書写黒の字を里山となせるにや	書瀉黒の字誤て里山とし瀉を写に改め、黒の字ヲと朱にてヲを入れ、且つ誤ての二字を消す 如上
○〃 八〃	羽黒山と云にや出羽といへるも	羽黒山と云にや、月山湯殿を合て、とつゞけ、後云にやの次に、出羽といへるハ鳥ノ毛羽ヲ此国ノ貢物ニ献ると風土記に侍とやらんと入る
六六〃三〃	当寺武江	武―江
〃 五〃	法の灯	法の燈
〃 六〃	修験行法を…灵山霊地	修―験行―法を…灵―山
※〃 七〃	験効人貴且恐る	校―験人貴ヒ且恐ル、とし、校を消し験効と効を入る

○〃	八〃	長にしてめて度御山と謂つへし	ト、長にして目出度御山と可レ謂、とし返り点を朱にてうちしを後可を消し、謂ツへしと改む
六七〃二〃		月山にのぼる木綿しめ	月山に登ル木綿、と朱にて振仮名す
〃	四〃	雲霧山氣の中に氷雪を	雲—霧山—氣の中に氷—雪を、と上の四字にハ朱にて下の二字には墨にて—をひく
〃	六〃	雲関に入かと	雲—関
〃	七〃	息絶身こゝえて	息—絶身こゝえて、とし、こゝへと改む、—は朱
〃	八〃	頂上に臻れは日没て月顯る	頂上に到れは日没て月あらはる
六八〃四〃		此国の鍛冶霊水を撰て	鍛—冶灵水を、と—は朱
〃	五〃	潔齊して釵を打	潔—齊して釵を打
※〃	七〃	世に賞せらる	栄と誤り、賞と改む
〃	〃	龍泉に釗を淬とかや	龍—泉に釗を淬とかやと—及び振仮名朱
〃	八〃	むかしをしたふ	昔を
六九〃三〃		やすらふほと三尺はかりなる	やすらふ程、三尺斗なる
〃	四〃	半ハひらけるあり	半に

〃	五〃	春を忘れぬ遅さく	はるをわすれぬ遅櫻の
○〃	七〃	行尊僧正の哥の哀も爰に思ひ出て猶まさりて覚ゆ	行尊親王の哥の哀も増りて覚ゆ、として親王を朱にて僧正と改め、哥も爰に思出て猶哀も増りて覚ゆ、とつゞく
七〇〃一〃		山中の微細	微—細
〃	三〃	筆をとゝめて記さす	しるさす
〃	四〃	阿闍閻の需に依て	阿闍梨の求に仍て
〃	五〃	短册に書	短尺
〃	八〃	湯殿にぬらす袂かな	哉
七一〃一〃		銭ふむ道の泪かな	なみた
〃	三〃	物のふの家に	ものゝふの
〃	五〃	酒田の湊に下る	みなとに下ル
○七二〃一〃		暑き日を海にいれたり最上川	暑き日を海に入レたる、としてるを朱にてりに改む
〃	二〃	数を盡して	盡して
〃	三〃	方寸を責	責ム、と朱にてムの字入る
〃	四〃	磯を傳ひいさこをふみて	磯をつたひいさこを踏て

如上

〃	七〃	鳥。海の山かくる
〃	八〃	闇中に莫作して雨も又奇也と
七三〃	一〃	雨後の晴色
〃	二〃	膝をいれて
〃	二〃	雨の晴。を待
〃	三〃	天能霽て朝日花やかにさし。出る
〃	七〃	花の上こくとよま。れし
七四〃	三〃	此。処に行。幸ありし事
〃	四〃	いまた聞。す
〃	七〃	鳥海天をさゝえ。
〃	八〃	江にあ、り
七五〃	二〃	海北にかまえて
〃	三〃	浪打入る。所を
〃	四〃	江の縱横
〃	五〃	松嶋。ハ笑。ふか如く
〃	六〃	寂しさに悲しみを

鳥、海と朱にて一を入る
闇、中…奇なり、(一は朱)
雨、後の晴、色 (はじめの一は朱、あとのは墨)
入て、とし後いれと改む
雨の晴るゝを待
晴て…指出る
読れし
この処に御幸、とし御を消して行と改む
きかす
さゝへ、をえと改め、又夫を消す
江に有
かまへてのへをえとし、又消してへとす
入るゝ縱横(シウヲウ)
松しまはわらふか
さひしさにかなしひを

		くはえて
七六〃	一〃	雨に西施かね。ふの花
〃	五〃	ミのゝ国の商人
〃	六〃	戸板を敷て夕凉。
〃	七〃	巣をみる
七七〃	二〃	遙々のおもひ
〃	三〃	加賀の府。まて百卅。里
〃	五〃	越中の国一ふ。りの関
〃	七〃	暑。濕の労に神をなやまし病お。こりて
七八〃	三〃	今。日。ハ親しらす
◎〃	六〃	一間隔て面。の方に (板本ハ西・ともよめるが素龍自筆本は明らかに面・と有)
〃	七〃	若き女。の声二人斗。ときこゆ
〃	八〃	年老。たるおのこ

くはへて、としへをえ。と改め、又へとす
ねぶ、と朱にて濁点加ふ
美濃国商人
夕すゝみ
見る
遙遙とし、後下の遙を消して々とす
府。の字あいまいなりしを府。と改む百三十里と書
一ぶり●、と朱にて濁点ふる
暑、濕の…病をこりて、とし朱にて一を入れ、をを後におと改むけふハ
この曾良自筆本も明らかに面。
をんな…二人計と
年寄、たる

七九〃四〃	あすハ古郷にかへす文したゝめて。	古里に…したゝめ
八〇〃一〃	物云をきく〳〵	聞〳〵
〃 二〃	あした旅立に	旅たつに
〃 五〃	御跡をしたひ侍ん。	侍らん
△〃 八〃	泪を落す不便の事にハ侍れとも	なミたを落す…事にハおもひ侍れとも
八一〃二〃	只人の行にまかせて	唯
〃 四〃	かならす悲なかるへし	必つゝかなかるへし
〃 〃	云捨て出つる哀さ。しハらく	云捨て出つゝあはれさ
〃 八〃	くろへ四十八か瀬	くろべ四十八ヶ瀬
八二〃二〃	春ならすとも。	共
〃 四〃	是より五里いそ傳ひして	是ゟ…磯つたひして
※〃 五〃	山陰にいり蜑の苫ふき	山陰に入蜑の苫ふき…とし、苫を笘に改む
○〃 六〃	かすかなれは蘆の一夜の	かすかなれハ、一夜の宿かす、とつゞけ後、苫のを補ふ
〃 八〃	いひをとされて	云イおとされて、とし、おをを に改む
八三〃一〃	分入右は有磯海	有ソ海

〃 四〃	大坂よりかよふ商人何処と云者。	大坂ゟ…云もの
八四〃二〃	塚も動け	うこけ
※〃 四〃	秋涼し手毎にむけや爪茄子	秋すゝし…爪天、茄とし、天を消し、子をつけ加ふ
〃 六〃	日ハ難面もあきの風	秋の風
○八五〃一〃	太田の神社に詣。眞盛か甲	詣の下に斎藤別当ありしを消す
△〃 二〃	往昔源氏に属せし時	其昔
〃 三〃	義朝公より給ハらせ給とかや	ゟ□ハらせ給ふ、とあいまいな字体なりしを朱にて消したまと改む
〃 五〃	目庇より。	ゟ
※〃 七〃	眞盛討死の後	射死とし、後討と改む
八六〃三〃	緣記にみえたり	見え
〃 五〃	白根か嶽跡にみなして	見なして
〃 六〃	左の山際に観音堂あり。	左りの…有
八七〃二〃	那谷と名付給ふとや	那谷、と振仮名有
※〃 五〃	奇石さま〳〵に古松	寄名さま〳〵に古一松、とし後墨にて奇、

△八八〃一〃　其功有明に次と云　朱にて石と改む

〃　三〃　山中や菊ハたおら　有間、と有、

〃　七〃　ぬ　たをらぬ、とし後おと

〃　八〃　風雅に辱しめられて　改む

○八九〃三〃　洛に帰て　ハッカシメ辱られて、と朱にて

○〃　六〃　今更むかし語とハ　帰りて

〃　七〃　なりぬ　振仮名有

○九〇〃一〃　先立て行に　物かたりとハ成ぬ、と

〃　三〃　行〳〵てたふれ伏　し、後物を消す

〃　四〃　とも　先立て旅立行に、とし

△〃　六〃　全昌寺といふ寺に　旅立を後に消す

〃　八〃　とまる　如上

九一〃一〃　此寺に泊て、終宵　ゆき〳〵て

〃　二〃　秋風聞や　隻鶴とし、後鳧に改む

○〃　一夜の隔千里に同　けふよりや

明ほの〻空近う読　し吾も　今日よりや書付消

秋風を聞て衆寮に　さん

臥は。　泊りて、終夜、

聽て衆寮に臥バ　おなし我も

明ほの〻空ちかふ（朱

〃　五〃　経声すむま〻に鐘　にてう。と改む）読経聞

〃　六〃　板鳴て　ふ板鐘鳴て、とし、之

〃　堂下に下るを若き　読経に貼紙して、空ちかう

◎九二〃一〃　僧とも　経声スムマ〻ニ、と

〃　紙硯をか〻へ　改め、板鐘の板を消し

〃　庭掃て出はや寺に　て鐘の下に板を入る

散柳　堂下に下ル、若き僧共、

（板本、出るやに誤る　も素謂自筆本出はやと有）　とし、後にヲの字を入

○〃　二〃　とりあへぬさまし　る

て草鞋なから　かゝへて、としへをえ。

と改め、又へとす

〃　四〃　舟に掉して汐越の　庭掃て出はや寺にちる

松を尋ぬ　柳

△〃　六〃　終宵嵐に波を　とりあへぬ、句草鞋な

〃　八〃　此一首にて…もし　から、とし一句を朱に

九三〃四〃　一辨を　て消してさましてと朱

北枝といふもの　書にて補ふ

掉指て…尋、とありし

を指てを消してて。と

し、尋の下にスと朱に

て入る

終夜、

この一首にて…若一辨

を

云もの

〃	七〃	思ひつゝけて	おもひ
○九四〃二〃		物書て扇引さく余波哉	物書て扇引割名残哉、とし割の字を消してさくと改む
〃	六〃	跡をのこし絵ふも貫きゆへ有	跡を残し給ふも貫き故、有
九五〃一〃		たそかれの路	道、
※〃	三〃	古き隠士有いつれの年にか	隠子、と誤り後士と改む、いつれの年にや、と有
〃	八〃	そこ〳〵と敎ゆ	をしゆ
九六〃一〃		夕貝へちまのはえかゝりて	夕顔…はかゝり、としはえかゝりて、と朱にて入る
〃	三〃	さてハ此うちにこそ	扨は
〃	七〃	此あたり何かしと…尋給へといふ	このあたり何某…と云
九七〃五〃		つるかのみなとに	湊にと旅立
〃	八〃	とたひ立路の枝折とうかれ立	道の
九八〃二〃		橋をわたりて玉江の蘆ハ穂に出にけり	渡りて玉江の芦は穂に出けり、として後にに入る
※〃	五〃	燧か城かへるやま	火打か城、とし火打を消して燧と改む、かへる山、とす
〃	六〃	十四日の夕くれ	夕暮
〃	八〃	その夜	其夜
九九〃二〃		越路の習ひ猶明夜の陰晴はかりかたしと	ならひ明夜の…はかり難し、とし後明夜の上に猶を入る
一〇〇〃三〃		土石を荷ひ泥淳を	土石を荷泥淳を、とし荷ヒと朱にてヒを入る
※〃	七〃	遊行の砂持	遊行、砂持、とし後朱にてのを入る
一〇一〃五〃		十六日空霽たれは…種の浜に	空晴たれは…種(イロ)の浜、と朱にてイロと振仮名す
〃	八〃	破籠小竹筒なと	さゝへ、を消して小竹筒と改む
一〇二〃三〃		吹着ぬ濱ハわつかなる海士の小家	吹付ぬ…蜑の、とし付を消して着と改む
〃	五〃	法花寺あり爰に茶を飲	法華寺有爰にちやをのみ
〃	六〃	夕くれのさひしさ	夕暮のさひしさやすまに勝たる、とし勝を消してかちと改む
〃	八〃	寂しさや須磨にかちたる	

○ 一〇三〃二〃	其日のあらまし。	日記とし、後之を消してあらまし。と改む	如上
〃 四〃	此みなとまて出むかひて	このみなと迄	
○ 六〃	駒にたすけられて。	駒をはやめて、と有を消して、にたすけられて、と改む	如上
○ 七〃	曾良も伊勢より來り合。	伊勢よりかけ合、とし かけを消して來り、と改む	如上
○ 一〇四〃三〃	日夜とふらひて蘇生のものに	日夜とふらひてふたひ蘇生の、としふたひを消す	如上
○ 四〃	且悦ひ且いたハる	且よろこひ且なけきて、としてなけきてを消していたハると改む	
〃 五〃	旅の物うさも	又ふねに乗て	
〃 八〃	又舟にのりて	別行秋そ	
一〇五〃二〃	ふたみにわかれ行秋そ		

（以上）

以上、大体曾良自筆本の内容を、漢字仮名の違ひに至るまで詳細に校異を記して來たのであるが、この曾良自筆本が芭蕉の草稿の姿を傳へてゐると考へられるので、芭蕉の草稿を想像する意味から、紙数のかさむのを怖れつゝ出來る丈詳細に異同を註記して來たのである。なほ本文は朱筆で句読点が全文に打たれてゐて解釈上に色々と問題を提供して呉れるのである。河西本との校合は、勝峯氏の註記が恐らく重要なものゝみにとゞめて居られるらしく簡單なので、右に記した位しか知り得ないのは残念であるが、大体この曾良自筆本の系統のものである事が推定出來ようかと思ふ。勝峯氏は近頃上梓された其の労作「日本文学大成本」の『芭蕉全集』（上巻）の『奥の細道』の解説中に、この河西本について次のやうに説明して居られる。即ち、

曾良傳本　信州諏訪で大正十二・三年頃と思ふ。教育会の人が案内して、曾良の遺品を襲藏する甥周徳、すなはち曾良の『雪丸げ』（更本とは別）を開板した――その後裔の河西家を訪れ、臺岐の勝本から送還した硯箱や何やの外に、『奥の細道』の写本があつた。「彌生も末の七日明ぼのゝ空」が「末の七日」の次に、「元祿二年にや」を挿入し、「ことし元祿二とせにや」のところが、「此たび」から、「奥羽長途の」へ続いてゐる。おや、奇怪に感じつゝ、異同を随所に見て、光堂の

五月雨や年々降て五百たび
螢火の晝は消つゝ柱かな

此二句を墨消しとしてあるので、或は芭蕉眞蹟の本文は、かう、書いてあるのでないかと疑問を抱いたのである。これが曾良の筆写であるなら、驚異的の存在であるけれど、後人、紙と墨の匂ひ、新らしさの漂ふ点が、私をして文政以後の副写本であることを鑑別させた。曾良日記は当時既に越後の酒造家とかへ譲られて、河西家には傳來しなかつた。本文の異同は俳書大系の『芭蕉一代集』に註記してあるから参考されたい。

此の勝峯氏の解説によつて河西本の全貌を想像出來ると思ふ。然し

て、右に云はれる曾良の筆写本が此の度現はれたわけである。

野坡が芭蕉の三十三回忌追善集として上梓した『放生日』（享保十一年刊）の巻頭扉に「芭蕉翁眞蹟」と云ふ『おくのほそ道』の図を載せてゐるが、此本は所謂枡形本でなくタテ長の本で私の曾良自筆本と形は似てゐるやうだが、「墨附三十二葉」とあつて、私の本の三十五葉とは三葉すくないのである。私の藏本は、芭蕉の草稿と字配りもおなじにするためであらう、各行の下の方は処々字をつめて書いてゐる形跡があつて、臨写した草稿と枚数なども同じにしてゐるらしいから、『放生日』に記す野坡傳來の翁正筆本とはその拠つた本がちがふやうである。幻住庵記が幾通りもあるやうに、この『奥の細道』も素龍に清書させるまで幾通りも芭蕉は書いたものと思はれ、その一本が越路の方も詳しく書かれてゐたといふ早い草稿であり、その他の一本が野坡傳來本であり（或は右の本と同一なのかも知れぬが）、又その他の一本が曾良の筆写した一草稿であつたのであらう。前に挙げた異同表によつて知らるゝ如く、この曾良の臨写した芭蕉の草稿は、越路の辺を詳記してあつた草稿よりもつと精撰された後の稿本、成稿本と異同の大して多くないところからすると、成稿になる直前の未定稿であつたのではなからうかと思はれる。曾良は之を写してのち、更に決定稿によつて校合を加へたものらしい。

異同表のあたまに○△※◎等の印をつけてみたのは、異同の内容を明らかにするために便宜つけてみたので、○印は芭蕉の推敲のあとを示すと考へられる個所であり、当面の問題の資料となるべき点である。△印は決定稿との異同で、之は大した異同はないけれども、僅かに異同のあるのは、校合の際の曾良の見落しであるか、又は曾良のみた決定稿がさうなつてゐたのか、其の点は明らかにし難いと思ふ。次の※印は草稿を写したときの曾良の不注意による誤りと考へられるものである。最後に◎の印をつけたのは從來問題になつてゐる点が、この本にどうなつてゐるかゞ注意される個所である。

なほ、曾良自筆本は全文に亙つて朱で句読がうつてあり、例へば冒頭の部分は、

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也、舟の上に生涯をうかへ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす、

と云つた調子であるが、処々朱の書入あるのと同じ朱色であり、且つ朱の書入は曾良の筆蹟と思はれるので、恐らく曾良が句読を打つたものと思はれ、さうした点から少くとも曾良のよみ方が推量出來るのである。この句読が芭蕉の草稿にあつた句読をそのまゝ写したものであるならなほ参考になると思はれるがそこまでの事は分らない。少くも曾良はかうよんでゐたといふ事までは言へさうである。それですぐに問題になるのは、例のそゞろ神の個所である。即ちその辺の部分を少し長く引用してみると、

いつれの年よりか、（予も、の二字後より入る）片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上破屋に、（の、後より入る）蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春改れは、（改れば、を消し、立る、とす）霞の空に、白川の関こえむと、そゝろかみの、物に付てこゝろをくるはせ、（付、を消し、つき、と入る）道祖神のまねきにあひて、取もの手につかす、もゝ引の破をつゝり、笠の緒付かへて、（へ、をえにかへ、又夫を消す）三里に灸すゆるより、松嶋の月先心もとなし、（もとなし、を消して、にかゝりて、とす）住る方は人に譲りて、杉風が、別墅に移るに

草の戸も住替る代そ雛の家

面八句を書て庵の柱に懸置、（書て、を消す）

以上の如くである。即ち、そゞろを副詞とみるよみ方ならば、そゝろとかみの間に句読がある筈だが、さうでないところをみると、曾良はやはり、そゞろ神といふ一つ言葉に解してゐたものと考へられる。今異同表にかうした句読の問題は触れえなかつたけれど、ところどころにかういう問題への暗示を與へられる点があるので、之等の事については後日を期したいと思ふ。

それから、十一頁の八行目、裏見の滝の條に、曾良自筆本「碧潭に落たり」のあと「岩窟に身を」といふところ、岩の下二字を空白にしてをり、後朱筆で「窟に」と入れてゐるのは如何解すべきであらうか。之は恐らく芭蕉の草稿の字躰がよみにくかつたゝめに空白にして写し、後に補つたものであらうか。右の他、芭蕉の字の難読のため、そのまゝ臨写しておき後に正しくしてゐる例が他にも三四あるやうに思はれる。

二十四頁七行目、須賀川の軒の栗の條、「掾ひろふ太山もかくやと□に覚えられて」といふところ、□の個所、はじめ門ガマへの中に片仮名のタを入れたやうな字を書き、後朱筆で「閒」と改めてゐる。之も曾良にとつて難読であつたのであらう。

三十二頁三行目、蓑輪笠島の「條の是より遙右に見ゆる山陰の里をミのわ笠嶋と云」といふところ、地理的には左の筈なので從來問題があり、種々の説が出てゐるがこの曾良自筆本もはつきりと右と書いてゐる。先頃発見された西村家の素龍自筆本にも明らかに右となつてゐるので、之らから考へると、芭蕉の草稿に、左となつてゐたのを素龍が右と誤つたのだといふ説より、曾良もかく明瞭に右とかいてゐる事から思ふと、芭蕉の草稿自体が既に右と誤記されてゐたものかと考へられる。曾良の『奥の細道随行日記』、同じく『俳諧書留』、『猿蓑』所出の此の句の詞書等すべて左とあるから、之は恐らく誤記であつたのであらう。桃隣の『陸奥鵆』にも左とある。

三十九頁三行目、壺碑の條に「むかしよりよみ置る哥枕おほく語傳ふといへとも、山崩川流て道あらたまり」といふところ、井筒屋板本の素龍本等は「川落て」とあつて意味を成さないのを、この曾良自筆本は素龍自筆本と共に、「川流て」となつてゐて、之が芭蕉の正しい文章だつたと思はれる。

四十五頁二行目、松島の條に、「欹ものハ天を指、ふすものは波に匍匐」といふところ、板本の素龍本は匍匐とあるが、素龍自筆本と、この曾良自筆本とは共に、門の中に甫の字と門の中に畐の字を書いてをり、曾良本は之に墨で「ハラハウ」と振仮名してゐる。両者とも芭蕉の草稿のまゝに写したものと思はれる。

五十六頁四行目、尿前の関の條の「蚤虱馬の尿する枕もと」の句、從來多く「馬のシトする」と読んでゐるのは、尿前の地名にひかれてよみたい心理もあるかと思はれるが、曾良は「ハリ」と振仮名してゐるから、馬のバリするとよんでゐたものであらうか。

六十一頁三行目、立石寺の條、「岩に巖を重ねて山とし」とあるところ、曾良本はじめ「岩尾」とし、のち「巖」の字にかへてゐるところをみると、やはりあとの字は岩尾とよむべきであらう。從來も多くの人はさうよんでゐたと思はれるけれど、之ではつきりするやうに思ふ。

七十八頁六行目、市振の條に「一間隔て面の方に」といふところ板本の字、面とも西ともよめて甚だ心許ないが、曾良自筆本は素龍自筆本と共にはつきり「面」となつてゐて、オモテをよむべき事を決定する。

九十二頁一行目、全昌寺の條の「庭掃て出はや寺に散柳」の句は素龍・曾良両自筆本ともに『鳥の道』など〻共に「出ぱや」とあつて、板本の「出るや」は、「は」の変体仮名のよみ違ひによる誤りと思はれる。

九十三頁の「丸岡天龍寺の長老」といふのは丸岡は明らかに松岡の誤記であるが、之は曾良素龍両自筆本ともに「丸岡」とあるから松岡への途中にある丸岡を芭蕉が記憶ちがひで草稿そのものが誤つてゐたものらしい。

さて、このあと、芭蕉の推敲のあとをたどつて、芭蕉の制作過程の問題に触れてゆきたいと考へてゐたけれど、既に與へられた紙数を倍以上も超過してをり、私の病氣のため締切日も随分延ばしていたゞいてゐるので、本論を他日に期する事にして此度は、曾良本の全貌を紹介した丈にとゞめておきたいと思ふ。（一九五一・一・二二）